

くまぷすマガジン

海域アジア・オセアニア研究 京大拠点

Kyoto
University
Maritime
Asian and
Pacific
Studies

Volume 3

2025 年 9 月 24 日 発行

目次

〈調査報告〉

ニューカレドニア・マレ島における「食べる」ヤムイモと「贈る」ヤムイモ

増田桃佳

ヤムイモ祭りから見たヤムイモの栽培と消費

増田桃佳

島原半島沿岸の石干見・スクイの分布と歴史

中尾勘悟

海域アジア・オセアニア地域についての WebGIS: インタラクティブなオンライン地図の構築

古澤拓郎



海域アジア・オセアニア研究
Maritime Asian and Pacific Studies

くまぷすマガジン発行にあたって

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻

古澤拓郎

2022 年 4 月から、大学共同利用機関法人人間文化研究機構（NIHU）による「グローバル地域研究プロジェクト」の一つとして、「海域アジア・オセアニア研究プロジェクト（Maritime Asian and Pacific Studies : MAPS）」がスタートしました。MAPS は、中心拠点である国立民族博物館のほか、京都大学拠点、東京都立大学拠点、東洋大学拠点の四つの拠点で構成されています。京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（ASAFAS）東南アジア地域研究専攻に設立された京都大学拠点では、「食と健康の文化」をテーマに研究を行なっています。

「食と健康の文化」というのは何でしょうか？ヒトは食料を生みだし、病や怪我を治し、生きてきました。そのようなヒトを研究するときに、食料や栄養素が足りているのか、どれだけ長く生きていくことができるのか、という指標は大きな意味を持ってきました。しかし、生きている人をみると、ただ生存していれば良いというものではありません。つまり生存に必要な栄養素を充足していれば良いのではなく、美味しい食べ物を、仲間と一緒に、楽しく食べたいものです。それに生きているのであれば、単に病や怪我がないだけではなく、毎日明るく幸せに生きていきたいものです。食と健康は、ヒトにとっての根幹であり、それを満たすために豊かな文化が形成されましたが、その価値と目的は常に柔軟に変化してきました。ライフからヘルスへ。そして、身体・精神・社会で定義されるヘルスから簡単には定義されえないウェルビーイングへ。「食と健康の文化」をテーマとする本拠点では、広い意味での「ウェルビーイングの文化」を明らかにしていきます。

つまり本拠点は、何らかの形で海域にまつわる人間のウェルビーイングについて、文化や気候風土といった基礎的なことから、現代的な課題という応用的なことまでを明らかにするべく、研究に取り組んでいきます。

京都大学（略称 KU）で行なわれる MAPS 事業なので、「KUMAPS＝くまぷす」と略し、研究成果を発信していきます。ここに紹介するのは、くまぷすによって各地で調査をした研究者のレポートです。同じ内容をホームページ（<https://maps.asafas.kyoto-u.ac.jp/>）でも発信していきます。たくさんの方々に、研究活動について知っていただければ、この上なくうれしいです。

ニューカレドニア・マレ島における「食べる」ヤムイモと「贈る」ヤムイモ

東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻
増田桃佳

キーワード：自給的農業、贈与交換、食生活、社会的つながり

要旨

近代化が進む中、根菜類の栽培を中心としたオセアニア地域の自給的農業はどのように変化しているのだろうか。オセアニアで最も市場経済が浸透している地域の一つであるニューカレドニアでは、ヤムイモを中心とする農業が現在も盛んに行なわれている。しかし、輸入食品の普及によりヤムイモの食料としての重要性は低下しており、農業の目的は儀礼において贈与するヤムイモの生産に偏りつつある。本来、食糧生産を主目的とする農業が、社会的役割に偏重するニューカレドニアの事例を研究することで、現代における自給的農業の役割を明らかにしたい。

背景と目的

ニューカレドニア先住民カナック社会は、しばしば「ヤムイモの文明」と呼ばれる。ヤムイモは「伝統的な」主食であるだけでなく、婚儀や葬儀における最も重要な贈与品であり、土地／祖先／他者とのつながりを象徴する神聖な作物とされている。18世紀における西洋人との接触以降、カナック社会におけるヤムイモのあり方は大きく変化したものと思われる。市場経済化に伴い、米をはじめとする輸入食品が普及し、食卓におけるヤムイモの消費は減少している。一方で、今もなお贈与品としての価値は維持されており、婚儀においては数百本のヤムイモが贈与される。そのため、食料としての重要性が低下した現在も、ヤムイモはカナックの間で盛んに栽培されている。本調査は、ニューカレドニア・マレ島において、「食べる」ヤムイモと「贈る」ヤムイモの実態を明らかにすることを通じて、近代化が進んだ現代のオセアニア地域における自給的農業の役割を明らかにすることを目的とする。

調査結果の概要

今回の調査では、「食べる」ヤムイモと「贈る」ヤムイモの区別に着目して聞き取りと観察を行なった。「食べる」ヤムイモと「贈る」ヤムイモは、主に品種と見た目を基準として区別される。「贈る」ヤムイモは、「本物のヤムイモ」と呼ばれる象徴的価値の高い古くから存在する品種が適切とされており、

大きく、表面が滑らかで毛の少ないヤムイモが好まれる。一方、新しく普及した品種など象徴的価値の低いヤムイモや、小さくて表面がボコボコしている見た目の悪いヤムイモは、贈与品には向かず、食用とされる。象徴的価値の高い品種でも、見た目が悪ければ食べられ、反対に、新しい品種でも見た目が良ければ贈ることもあるなど、最終的な区別は収穫後に見た目を加味して行なわれる。また、栽培する時点からこの二者はある程度区別されている。「食べる」品種のヤムイモと「贈る」品種のヤムイモをそれぞれ別の畑に植えたり、イノシシによる獣害の恐れがある場合は、「贈る」品種のヤムイモを畑の中心部に植え、その周囲に「食べる」品種のヤムイモを植えることで、「贈る」品種のヤムイモを守るという対策が取られている。また、「贈る」品種のヤムイモを植える際は、イモが大きく育つように、深い穴を掘って地中に張り巡らされている根を丁寧に取り除いていた。

このように、今回の調査では、「食べる」ヤムイモと「贈る」ヤムイモが認識の上で区別され、異なる方法で栽培されていることがわかった。次回以降の調査では、「食べる」ヤムイモと「贈る」ヤムイモの生産／消費／贈与を詳細に調べる予定である。また、オセアニア地域では、近代化に伴う肥満やメンタルヘルスの低下などの健康課題が社会問題となっているが、近年、自給的農業の健康効果が着目されている。ヤムイモの消費と栄養素摂取量・肥満との関連や、ヤムイモの贈与と社会的つながり・メンタルヘルスとの関連についても着目することで、ヤムイモ栽培を軸とした自給的農業の、地域の健康課題への貢献も明らかにしたいと考えている。



写真1：婚儀におけるヤムイモの贈与



写真2：バールを使い、ヤムイモを植えるための穴を掘る若い男性たち

参考文献

1. Lormée, N., Cabalion, P., Hnawia, É.S. (2011) *Hommes et plantes de Maré*. IRD Éditions.
2. Dubois, M.J. (1971) Ethnobotanique de Maré, Iles Loyauté (Nouvelle Calédonie). *Journal d'agriculture traditionnelle et de botanique appliquée*, 18, pp.222-273.

ヤムイモ祭りから見たヤムイモの栽培と消費

東京大学大学院医学系研究科国際保健学専攻

増田桃佳

キーワード：農業、贈与交換、食生活、ヤムイモ

要旨

非都市部に居住するニューカレドニア先住民カナックは、ヤムイモ栽培を軸とした家族農業を主要な活動の一つとしている。ヤムイモは儀礼におけるもっとも重要な贈与品であるため、輸入食品が浸透した現代においては、農業の主目的は、食糧生産というよりも、贈与するためのヤムイモの栽培となっている。今回の調査期間中、初物のヤムイモの収穫を祝うヤムイモ祭りを体験した。祭りを通じて、ヤムイモが栽培段階から贈与に向いている文化的価値の高い品種とそうでない品種で区別されていること、ヤムイモは祭りの前後どちらにおいてもあまり食べられていないことがわかってきた。

背景と目的

フランス領ニューカレドニアはオセアニアで最も GDP が高い地域の一つであり、メラネシア系先住民カナックは市場経済に強く取り込まれている。一方で、非都市部に居住するカナックはヤムイモ栽培を現在も主要な活動の一つとしており、ほとんどの世帯が賃金労働や補助金から現金収入を得ながらヤムイモ栽培を行っている。過去の「くまぷすレポート」にも記述したように、この背景として、ヤムイモが贈与品として非常に大きな価値を持つことが挙げられる。元来ヤムイモは主食として日常的に食べられていたが、現在は市場経済の浸透により米やパンなどの輸入食品が主食として定着しているため、ヤムイモが食卓に上る機会は少なくなっている。本来、食糧生産を主目的とする農業が、カナックにおいては贈与品の生産に偏重していると考えられ、この事例を研究することで、現代オセアニアにおける農業の役割を明らかにすることが本研究の目的である。今回の調査では、非都市部のマレ島で、ヤムイモの栽培と消費についてデータ収集を進めた。

調査結果の概要

収集したデータに関してはまだ分析途中なので、今回の調査中に体験したヤムイモ祭りについて、ヤムイモの栽培と消費に焦点を当てながら紹介する。ヤムイモ祭りは 2 月から 3 月ごろに行われる初物のヤムイモを祝う祭りで、ニューカレドニアで全土的に見られるが、祭りの内容や時期には地域性がある。私

が調査したマレ島ラ・ロッシュ地区では、2月末に2日間に渡って行われた。祭りの前日に初物のヤムイモを掘り（この時まで、昨年植えた新しいヤムイモを掘ることも食べることも禁止されている）、祭りの1日目には氏族単位でヤムイモを持ち寄り、地区の大首長に献上した。2日目はカトリック教会でヤムイモの「祝福（収穫を喜び、神に感謝すること）」が行われ、その後、各家で初物のヤムイモが食べられた。石蒸し料理をする家もあれば、茹でて食べる家もあった。

ヤムイモ祭りで献上・「祝福」されるヤムイモは、主に *Wadrawa* と呼ばれ、*Dioscorea alata*（ダイジョ）に属する。ニューカレドニアで栽培されている品種のほとんどは *Dioscorea alata* に属し、その中の分類に文化的価値の違いが存在する。*Wadrawa* は最も神聖で文化的価値が高く、ヤムイモを贈与する際は必ず1本は贈ることが望ましいとされており、最も早い時期に植えられ（6-7月ごろ）、最も早い時期から収穫が始まる（2-3月）。反対に、もっとも文化的価値が低いとされ、贈与に向かない外来の品種（*Dioscorea alata*, *Dioscorea cayenensis*, *Dioscorea transversa* などを含む）は、11-12月ごろに植えられ、8-9月ごろに収穫される。このように品種によって植える時期が異なるため、植える品種と時期に応じて複数のヤムイモ畑を作るケースが多く、栽培の段階から品種の文化的価値による違いが見られることがわかってきた。食生活に関しては、ヤムイモを食べる頻度はヤムイモ祭りの前後に関わらず少なかった。祭りの前は、前年に収穫したヤムイモの残りがあれば食べていたが、腐っていたり、味が劣化していたりした。祭りの後についても、ヤムイモ祭り当日以外はあまりヤムイモを食べていなかった。その理由として、祭りの直後は、収穫できる品種が、収穫時期が早く、贈与に向く品種に限られていたことが考えられる。また、一般的にヤムイモは若い人にあまり好まれておらず、その上、調理に手間と時間がかかるので、ヤムイモの有無に関わらず米が好まれるという側面もあると考えている。本格的なヤムイモの収穫は6月ごろに行われるため、その時期の食生活も調査して季節性の検討をしたい。



写真1：ヤムイモ祭り1日目。大首長（紫のTシャツの人物）に初物のヤムイモの山を氏族ごとに献上する。



写真2：ヤムイモ祭り2日目。カトリック教会でヤムイモを「祝福」する。



写真3：ヤムイモ祭りの2日目の「祝福」の後に食べられた、茹でた初物のヤムイモ

参考文献

1. Dubois, M. J. (1971) Ethnobotanique de Maré, Iles Loyauté (Nouvelle Calédonie). *Journal d'agriculture traditionnelle et de botanique appliquée*, 18, pp.222-273.
2. Varin, D. et Brévar, J. (2006) *L'igname en Nouvelle-Calédonie : espèces et variétés*. Centre de documentation pédagogique de Nouvelle-Calédonie.

島原半島沿岸の石干見・スクイの分布と歴史

肥前環境民俗（干潟文化）写真研究所

中尾勘悟

キーワード：島原半島、有明海、スクイ、石干見、伝統漁法

背景と目的

2022 年から着手した「島原半島と有明海の漁業についての調査」（石干見・スクイと石アバ）の最終的まとめを 2024 年 10 月ごろから始めた。2022 年と 2023 年の 2 年間、沿岸各地を訪ね現地（島原・吾妻・有明・有家・西有家など）の郷土史家、島原の「みんなですくいを造ろう会」の事務局、スクイの管理者、半島の各市町の図書館、長崎歴史文化博物館、大村のミライ on 図書館などを訪ねて資料を収集、その資料を参照しながらブックレットの執筆中である。

調査結果の概要

長崎歴史文化博物館レファレンス室で「長崎県水産第五課漁業の部」の明治 15 年前後の漁業・漁場申請を受け付けた漁場申請書の「仮和」の文書 5 冊の閲覧を申請して調べたところ、北高来郡（諫早湾北岸現諫早市高来町周辺）と南高来郡（現雲仙市・島原市・南島原市）の石干見漁の申請者の名簿、その申請書に添付した彩色された漁場の見取り図が、かなり見つかりカメラで接写した。現島原市三会海岸・現雲仙市瑞穂町伊古海岸・現諫早市高来町境川河口～水の浦海岸などの名簿や絵図があった。そこで今回は明治 30 年前後を調べると、南島原市西有江有家川河口～小川港周辺の文書や絵図が発見できるだろうと考えて、後日あらためて長崎歴史文化博物館レファレンス室を訪ね、長崎県水産課漁業の「仮和」明治 27 年 12 月に申請された文書 5 冊を閲覧した。すると 1 冊目の分厚い「仮和」文書の最初に南高来郡西有江村の有家川河口から小川港周辺の石干見・スクイの配置図と申請者の名簿も出てきた。更に閲覧すると諫早湾北岸の海岸の様子を描いた絵図もあった。

また、2024 年 5 月初め、「スクイ祭り」を覗いてからバスに飛び乗って、布津町大崎鼻を通って南島原市の西有江小川の郷土史家増田篤先生を訪ねる。しばらく江戸末から明治期にかけて盛んになった手延べそうめん製造と販路の話をお聴く。その後小川港から漁港を経て鬼塚家の番頭だった荒木家のスクイ跡（現在スクイの石積み中央部を開けて海水が出入りするようにして海水浴場に転換）に案内してもらった。このスクイ跡は地図に載っている。

南島原市口之津・南有馬・北有馬・有家を戦国時代に治めていたのは有馬氏で、有馬直義が布教を認めたためキリスト教は島原半島南部に広まった。口之

津に上陸したアルメイダ修道士が布教を始め、領民もキリスト教に帰依。天正4年（1576年）、口之津港にポルトガル船が入港し、キリシタン大名だった大村派の大村純忠の兄にあたる有馬直義も本格的に南蛮貿易に乗り出す。その年直義はキリスト教に改宗。3年後ローマから派遣されたヴァリーニャーノ巡察師がやって来て宣教師会議が開かれ、布教活動が盛んになり、島原半島はキリスト教の一大中心地となる。

その後日本人の聖職者を育成するためにセミナリヨとコレジョが開かれ、天正8年（1580年）、有馬のセミナリヨが日野江城下に開校、22名が入校。のちにコレジョも開校。天正10年（1582年）、4名の少年が遣欧使節としてローマとヨーロッパに派遣されたが、幕府のキリスト教禁令により後に帰国。遮欧使節団が戻るときには発明されたばかりの活版印刷機を持ち帰っている。当時島原半島南部は、日本で最もヨーロッパの文化を満喫していたことになる。フロイスは「日本史」を口之津・加津佐滞在中に書き上げている。

その後の島原半島は「島原大変肥後迷惑」、いわゆる眉山の大崩壊が1792年5月に起こり、土石流と津波により1万5,600人が犠牲になった。200年後の1990年秋、普賢岳が噴火を始め、翌1991年6月3日には大規模火砕流が発生、死者43名を出す大惨事となる。その後もたびたび火砕流が起こり、家屋が埋まり耕地が流され漁場も荒れ被害甚大だった。その後の復興計画の中で、この大災害の記録を残すためと島原半島の魅力を訴えるために「島原半島ジオパーク」が建設された。

嘉永14年10月（1637年12月）、島原の松倉氏（重正・勝家）の圧政・重税とキリシタン弾圧に抗して「島原の乱」が起こるが、多くの信徒が天草四郎のもとに参集し原城に立て籠もった。しかし、幕府の軍勢の兵糧攻めに遭い1638年4月落城、3万7,000人のキリシタンは全員殺され島原半島南部はほとんど無人状態になる。松倉氏はその後島原城を建てたのだが、城壁の石のほとんどを原城から運んだと言われている。

幕府のキリスト教禁止令が出ると、有馬氏はキリスト教を捨て、領民のキリシタンを弾圧したが、そのことが心の重荷になり、1614年幕府に国替えを願い出て日向延岡へ転封になった。そのとき家臣の中には信仰を捨てず武士の身分を捨てて農民になって島原半島に残ったものがかかなりいたと言われ、彼らも原城に馳せ参じたから原城の守りは固かったのかもしれない。

無人状態になった島原半島の南部には、近隣の藩からかなりの移住者があったようだが、瀬戸内海の小豆島からも製麺職人が移住したと言われている。幕府は天草諸島と島原半島の人口が激減した地域に、各藩に一万石あたりに農家を一戸送り込むように命じているが、どれほどの効果がったのだろう。よく言われているのが「島原半島の北目（凡そ島原と小濱を結ぶ線以北）ん人は大人

しかいじょん、南目ん人はおおどか（押しが強くて積極的）」という感想である。しかし、長崎県の中では、島原半島の人の気質は明るく積極性があると思う。





海域アジア・オセアニア地域についての WebGIS： インタラクティブなオンライン地図の構築

京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究科東南アジア地域研究専攻
古澤拓郎

キーワード：WebGIS、可視化・見える化

背景と目的

本プロジェクトの主題である「海域アジア・オセアニア地域」が含むのは、ユーラシア大陸の東・東南沿岸部、東・東南アジアの島嶼部、オセアニア（大洋州）の島々とオーストラリア大陸であり、地球表面の三分の一以上の面積に相当するが、そのほとんどは海で占められている。人間が暮らすのは陸地たる島と大陸であり、自然生態系や人間社会はしばしば海あるいは溪谷・山・川によってお互いに隔てられている。しかし、遠く離れた人間社会で共通した暮らしや文化、さらには災害などの課題がみられるのも、この地域である。

地域研究者は、自分がフィールドとする地域について詳細な知識を持ちながらも、自分が訪れたことのない地域については文献等の情報に頼らざるを得ず、自分が特に専門とする事象を除けば、暮らしや文化あるいは環境を構成する各要素の地理的な分布を十分には把握していない。そこで、各社会の暮らしや文化の分布状況を可視化することの学術的価値が高く、例えば大林太良・杉田繁治・秋道智彌（編）『東南アジア・オセアニアにおける諸民族文化のデータベースの作成と分析：国立民族学博物館研究報告別冊 11 号』（国立民族学博物館 1990）の成果が挙げられる。

本プロジェクトでは地理情報システム（GIS）によって、海域アジア・オセアニアを特徴づけるデジタル地図を作成し、ユーザーが必要な情報を得たり、目的に応じた地図表示をできるシステムを構築し、それを ArcGIS Online（ESRI 社）によってインターネット公開する。

調査結果の概要

GIS は緯度・経度といった位置情報と紐づけられた地理データを、レイヤ（層）状に重ねられることに特徴がある。いくつものレイヤのうち、必要なものを表示したり不要なものを非表示にしたり、あるいは各レイヤの中から特定の情報だけを抽出したり、といった操作が可能である。デスクトップ型の GIS を操作するにはある程度の習熟が必要であるが、オンライン型の ArcGIS Online はインスタントアプリ（Instant App）機能により直感的操作が可能な地図にし

て、公開することができる。本プロジェクトで作成した地図は、「食と健康 map」というページにて、随時公開されている。

海域アジア・オセアニア研究京都大学拠点 食と健康 map

<https://maps.asafas.kyoto-u.ac.jp/map/>

2024 年度に公開したのは以下の二つである。

「インドネシア群泳多毛類の方名データベース（五十嵐忠孝氏収集）」は、五十嵐忠孝氏（元・京都大学東南アジア研究所）が収集した、インドネシア各地の群泳多毛類の現地名と分布の一覧に、研究に協力した古澤拓郎が情報を追加して GIS データベースにしたものである。東部インドネシアではこのような多毛類を食する文化があり、海域アジア・オセアニアにおける食文化の多様性を理解するうえで貴重な研究資料である。小スンダ列島ではニャレなどと呼ばれ、モルッカ諸島ではラオルなどと呼ばれるこの多毛類について、その名称が記録された場所は分散・点在しており、同じ島内でも分布に偏りがある一方で、離れた地域でも同様に祀られ、食されるという特徴がある。同データベースではインドネシア内の記録のみを挙げているが、パプアニューギニアのトロブリアンド諸島からポリネシアのサモアにかけてのオセアニアにも点在する。

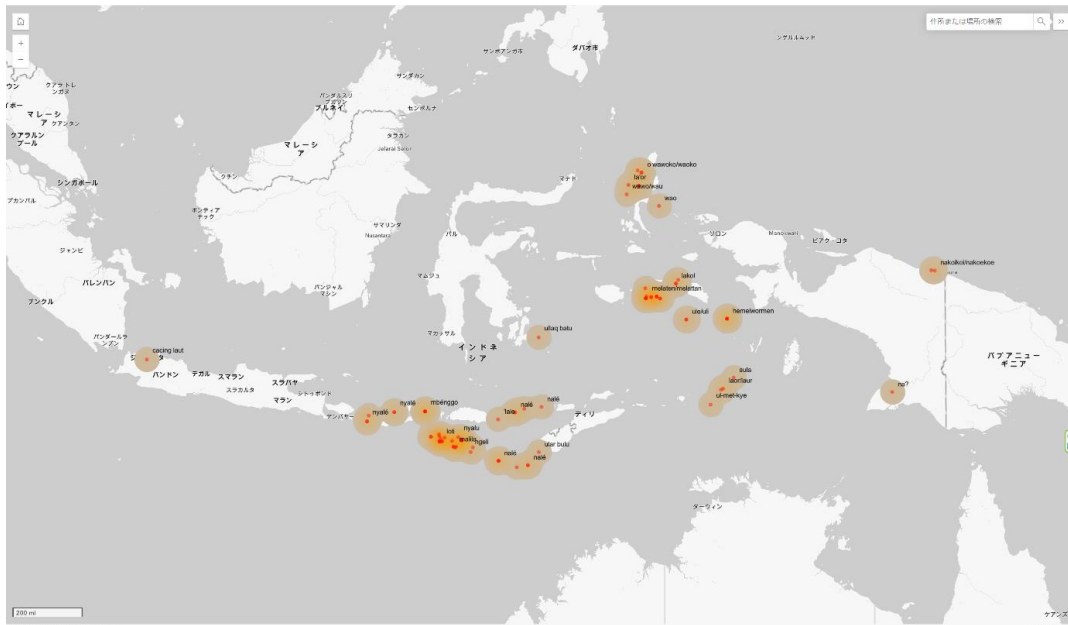


写真 1：ArcGIS Online「インドネシア群泳多毛類の方名データベース」

bit.ly/4fEN3XI



写真2：インドネシア・ロンボク島のニャレ

もう一つ公開された「オセアニア気候変動適応策データベース」は、本プロジェクトのブックレットシリーズで出版された古澤拓郎（編）『オセアニアの気候変動と適応策：地球から地域へ』（風響社、2024 年）と連動したものである。海面上昇や異常気象といった気候変動はオセアニアの小島嶼社会にとって深刻な影響を及ぼしつつあり、各地でそれに対する対策—適応策—が取られている。英語の査読付き論文として公開された各地の適応策を収集し、それをデータベースで公開した。各地でどのような影響がみられるのか、健康や生存に関わる問題が生じているのか、それに対してどのような適応策がとられたかがデータになっている。地図をズームしたり、各ポイントをクリックするとさらなる情報が表示され、地図左側のレイヤー一覧から、表示・非表示を切り替えることができる。

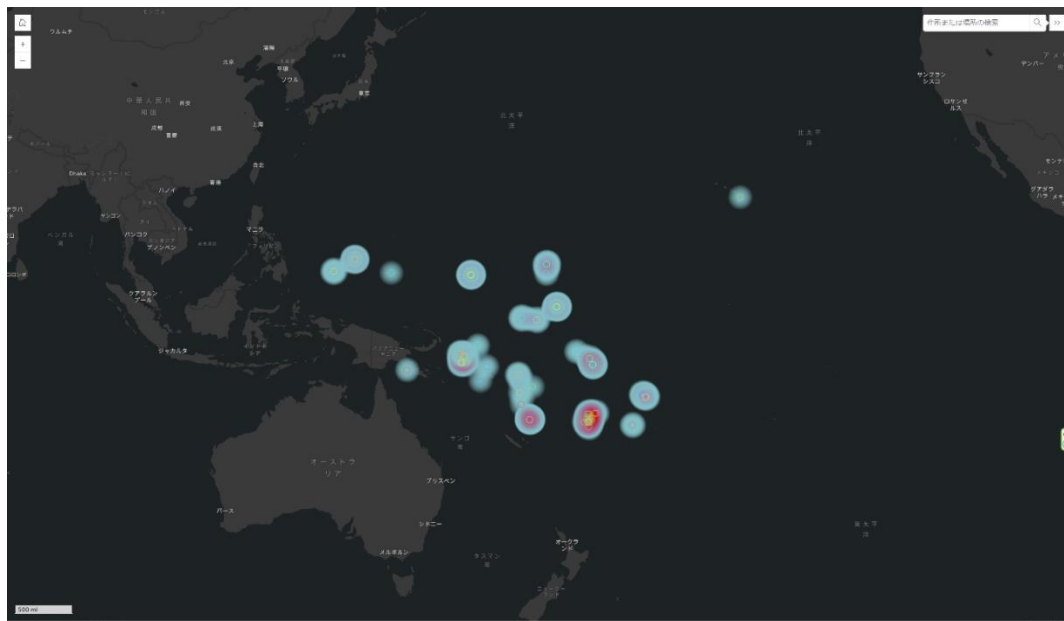


写真 3：ArcGIS Online「オセアニア気候変動適応策データベース」
bit.ly/4fJ01DP



写真 4：浸食により沿岸の植生が倒壊した様子（ソロモン諸島テモツ州）

今後の予定

WebGIS にはさまざまな技術的可能性があり、それは地域を超えた地域研究としての「グローバル地域研究」に大きな進展をもたらし得るものである。近年さまざまなデータがオンラインで公開されており、生成 AI の補助を得て大規模データの情報処理が可能になっている。このような技術的発達がある一方、地域研究のデータをこのような形で可視化することの難しさもある。今後は、そのような技術とその限界を意識しつつ、さらなる広域地域情報の可視化を展開していく。

参考文献

1. 五十嵐忠孝（2018）「インドネシアにおけるパロロ群泳・天体周期と在来暦法の特徴」『東南アジア研究』第 55 巻 2 号、pp.111-138。
2. 古澤拓郎編（2024）『オセアニアの気候変動と適応策：地球から地域へ』風響社。

書名

『くまぷすマガジン（海域アジア・オセアニア研究 京大拠点）Volume 3』

発行者

人間文化研究機構海域アジア・オセアニア研究プロジェクト京都大学拠点
京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科東南アジア地域研究専攻

編者

佐野文哉

編集補佐

水野裕美

写真

上：島原半島沿岸部調査の様子（中尾勘悟氏撮影）

下：ニューカレドニア マレ島ラ・ロッシュ地区のヤムイモ祭りの様子（増田桃佳氏撮影）

発行日

2025 年 9 月 24 日